



## はじめに

---

地球環境問題が世の人の話題にのぼり、わが国でさまざまな政策が打ち出されるようになったのはおよそ25年ほど前である。当時、フロンの大気中への放出が原因で南極の成層圏にオゾンホールが出現していることに世界は震撼としていた。北半球の一部の地域で集中的に使用されていたフロンの被害が南極上空で現れ、南極でオゾンを失った貧オゾン空気が今度は世界の空へ拡散してゆく。このようにして被害は地球的規模に広がっていたのである。

その後、地球環境に対する関心の高まりとともに、地球環境に関する知見は急速に蓄積されてきた。現在では、我々が春の風物詩として慣れ親しんできた黄砂もまた、地球環境問題にかかわる事柄として考え方対処せねばならない側面を持っていることが判ってきたのである。中国やモンゴルの乾燥地帯から砂塵が巻き上がる自体は昔から続いていることである。しかし、今日の科学的な理解によれば、乾燥地域の拡大傾向は多分に人為的なものであり、そこから発する砂塵は大気圏の放射バランスに影響することや水、硫黄、窒素などの物質循環に影響することを通して全地球的な気候・環境の変化とつながりうるものとされているのである。

そのような時代の流れを背景にして、黄砂問題検討会が設置されたのである。設置の趣旨や目的は、ほかで述べられているので繰り返さないが、この検討会が省庁の枠を超えた規模で情報交換と討議が行えた唯一の場であったことはここに記しておきたい。地球環境問題は、その性格上広く世界の各国の動向を見極めながら対応せねばならない。また、人間の生活そのものに根ざすところから問題が多岐にわたっている。ひとつの省庁ではとても対応しきれない問題が多い。このような状況の中で、この黄砂問題検討会は、常に多くの省庁、非政府機関などからオブザーバーが参加しており、こと黄砂にかかわる地球環境問題では、実質上はわが国の唯一の総合的に情報を交換できるプラットフォームとして機能したと自負している。

本報告書は、検討会委員、事務局担当者、オブザーバーとして参加いただいた各省庁の担当者や非政府機関の担当者など、多くの方の献身的な努力によって、なったものである。学術的に見ても最新の知見が盛り込んであるし、関係国の状況についても網羅的でしかもきわめて新しい情報が収めてある。かならずや、関係各位が黄砂問題に対して種々の企画立案を検討される際には大いに役立つとおもわれる。

黄砂問題検討会座長

岩坂泰信